

## 新田義弘先生のこと

新田先生の奥様から手紙が届き、先生が二か月前に亡くなられていたことを知った。

再任用で職場を去るわけでもないのに、退職に際してのスピーチを求められた。人前で話す機会があればいつも風変わりなことを語っていたことで奇異なものへの好奇心を引き起こしてしまったとするなら、その代償だろうか。上司からの要請を拒否できない立場からすればパワーハラには違いないのだが、私はそれをそれまで歩んできた時間を反芻し刻印する機会として利用した。内心では、私生活だけでなく職場に在っても人に阿おもねることなく自ら生きてきたことへの自負があった。

「私には、生涯、足を向けて寝られない方が二人います」

そう語り出した私の念頭には学部生時代の恩師、そして、新田先生があった。

大学生のころ、哲学関係の小論を読み漁あさるなかで何点か漠然と心惹かれる論文に出会った。そこに、未だ方向性が定まっていけないものの何某か将来の思考を予感させるものを感じた。読み終えて著者を確認すると、そこには同じように新田先生の名前があった。直接講義を聴いてみたいとは思ったものの在学する同志社からは離れた東京の大学の教官ではあり、暫し落胆して諦めの気持ちとともに意識の底に仕舞い込んだ。

都の教員となっても学への思いが途切れることはなかった。いつのことだったか、或る学習会の企画で新田先生の講演があることを知って胸が躍った。そして、講演が終わった後で、無謀にもゼミに出席させていただけなものか願い出た。その頃はまだ学部卒の身の上で、他に特筆すべき何物ももたない私を支えていたのは学への熱意と先生への敬意のみであった。

東洋大学の教室に入室すると、すでに十人ばかりの大学院生が待機していた。暫くして、新田先生の入室。見慣れぬ私の前で立ち止まったので、私は講演会での一件を説明し、再び受講の了解を得た。講義の間、私の胸は高鳴った。その時から先生が退職されるまでの九年間、その高揚感が萎えることはなかった。出席を何度か重ねたとき私は論文の提出を求められた。自信の持てる物は無かったが、都の倫理研究会誌に載せたものをコピーして手渡した。その翌週、先生の顔にわずかに笑みが浮かんだように見えた。私は講座への出席が正式に許可されたと感じた。

それ以後、別刷りの論考など数点をいただき、各研究会への紹介、勧誘を受け、また、上

田閑照先生を囲んでの学習会のお招きを受けた。それは新田先生を含め、わずか四人ばかりで唯識思想について学ぶもので、数回にわたり、それぞれ四、五時間にも及んだ。

ゼミにも慣れた頃、「生きた現在」をテーマとした研究発表を求められた。爾後、現象学からだけではなく、言語学をも参考にしてレポートを進めることは楽しかった。そこにはその後の研究テーマを予感させるものがあった。発表を終えたとき、先生からは「関心が同じなんですね」と好意的な感想が寄せられ、また後日いただいた手紙では学会での発表を強く勧められた。

大学の教員になるためには、過去に遡って適当な思想家を選び、その思想について細にわたって学び、テーマを設け、論説を立てなければならぬ。そうした作業を一度は試みてみたが、才がないのに加えてあまり有意義なこととも思えず、満足のいく結果は得られなかった。もともと二十代を文学上の創作とともに過ごしたためか、私は先哲の従僕となるような研究姿勢には馴染めず、哲学上の小論も独創をもって望んだ。それは或る研究会発表では好意をもって受け止められることもあったが、大抵は受け入れられるものではなく大学院の指導教授からは好事家的なことは止めなさいと咎められたりもした。そんななかで新田先生は数少ない理解者だった。先生の心がけられていたことは大哲学の解釈のみではなく、それを発展させることで、その独創性は「媒体性の現象学」となって結晶している。あるべき学習の態度をまだ萌芽の状態にあるとはいえ私のなかに見出だしていてくれたのだらうと思う。あるとき、柔軟な思考性を持っていると言葉をいただいた。

退官されて十年。傘寿を迎えられたことをお祝いする会が自由が丘で開かれた。新田先生は私に学会で権威となっている或る学者について「××君はダメだ！」と口にした。臨席すべきパーティにその方が参加していないことへの叱責なのか、あるいはその方の研究姿勢への批判なのかは分からなかった。しかし、そこに、老成してなお哲学への熱い思いが決して消えてはいないことを強く感じた。別れ際の先生からの「佐藤君、またね」という言葉は私の生涯の宝物となった。

高校教師としての定年も間近となり、私は先生からの年賀状を机に挟み、それを励みに仕事の合間を見つけては小論を書き綴った。所属する機関もなく、誰の眼を気兼ねするでもなかったが、念頭に新田先生の面影だけは置いていた。そして、二千十八年には「存在と言葉」を、二十年には「存在と時間」を著し、その別刷りを送った。両小論とも編集者からは賛辞をいただいたが、「存在と言葉」については何ら反応がいただけなかったため、「存在と時間」には力を注いだ。仏教に基づく東洋思想は新田先生のご関心でもあったので、道元の時間論をテーマとした考察は先生の関心に多少でも触れるという期待があった。

二千二十年六月八日、ポストに白い封書を見かけた。手にしてみると新田という姓とともに見慣れぬ名前が。もしかやと思い、急ぎ戻って開封した。そして、新田先生が亡くなったことを知った。途端に虚無という波が押し寄せ、そのなかに溺れてゆく自分を感じた。

親鸞聖人が真摯な生き方を望んだからこそ悩み苦しみ法然上人を訪ねたように、人生の

意味を見つけたらその道を究めた人を訪ねることが望ましい。新田先生は日本の哲学のあべき姿を間違いなく究めた碩学で、先生との邂逅は私にとっては夢のごとき出来事であった。今後、何を支えとして学習を続けてゆくか、真の「私」が問われているような気がする。

離任の挨拶では、新田先生については少しだけ触れ、他、同志社で学んだこと、また教職生活についてなど五分ばかり述べた。過去の職場にあつてはジャズピアノスト本田竹広氏を招いてジャズコンサートを企画したり、また市民講座を担当して哲学を講義したりもした。だが、そんな精力があつたのも四十台までで、五十歳を過ぎた頃からは気力も失せ、何につけても積極的に従事するということは無くなった。ただ平和と人権を語ることを除いては。

二〇二〇年六月十七日